

下鴨の王塚

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

埋蔵文化財の調査というと、まず発掘調査が思い浮かぶと思います。しかし、むかしの人々を書き残した記録を丹念に調べることによって、市内の当時の様子を明らかにし、これまで知られていない遺跡を新たに見つけることも重要な仕事の一つです。そのような作業からわかった古墳について、書いてみることにします。

江戸時代の紀行文や案内書に、深泥池の南に「王塚」と呼ばれる塚があったという記録があります。どのあたりにあったのか、紀行文や絵図から探ってみましょう。

江戸時代、安芸藩の藩医であった黒川道祐の書物に『近畿歴覽記』があります。これは、藩医を辞して京都に住んだ道祐が、京都を中心として延宝六年(1678)からの10年間に書いた紀行文です。そのなかに西陣あたりを出発し、賀茂川を渡って下鴨神社から深泥池、さらに岩倉の幡枝、鞍馬へ向かった「東北歴覽之記」があります。その下鴨神社から深泥池に向かうところで、次の一文が書かれています。

深泥池ノ南ニ王塚トテ車塚ノ跡アリ。其ノ西ニ王塚繩手ト云ウ路筋アリ、一代ノ主上御陵ト見ユ。何レノ御代ソ間カマホシキ事ナリ。

この文から、深泥池の南に「王塚」という車塚(古墳)があり、その

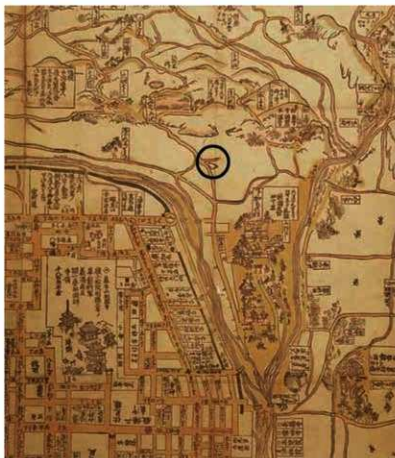


図1 江戸時代の絵図

○印は、図1～4いずれも王塚の位置を示す。

西側に「王塚繩手」と呼ばれる道があることがわかります。

この後に出版された『彌州府志』(1684)や『京羽二重織留』(1689)といった京都の地誌や名所案内などにも同様の記録をみることができ、深泥池の南、下鴨神社との間に古墳があったようです。

次に、江戸時代の絵図を見てみましょう。江戸時代には多くの絵図が出版されていますが、ほとんどの絵図には、下鴨神社と深泥池の間に古墳らしい記載はありません。

唯一、寛保元年(1741)に発行された『京大絵図』に古墳と思われる「小山」が描かれています。下鴨神社から深泥池に向かう道がこの西にあります(図1)。まさに、この小山が「王塚」であり、この道が「王塚繩手」であると思われる。

それでは、この王塚は現在のどのあたりにあたるのか、いつ頃まであったのか、明治時代以降の地図をしてみることにしましょう。

まず、明治時代の地図(図2)

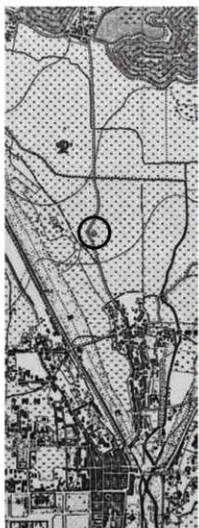


図2 明治時代の地図



図3 大正時代の地図



図4 現代の地図

を見ると下鴨神社あたりから深泥池に向かって一本の道があり、その中ほどに円形の高まりが描かれています。大正時代の地図（図3）でも同じ場所にこの高まりが描かれており、さらに東にも円形の高まりがあります。そして、この高まりの西側の「王塚調手」と呼ばれた道は、鞍馬街道（現在の下鴨中通）であることがわかります。

この後、昭和に入って、北大路通が造られ周辺の宅地化が進み、昭和10年代以降の地図（図4）にはこの古墳の高まりは記されなくなります。しかし、少なくとも昭和の初め頃までは現在の京都府立大学の南東部あたりに残っており、

地元では「西の塚」・「西大塚」・「石城山」などと呼ばれていたようです。また、石室が開いていたらしいことから、横穴式石室があったようです。

そして、鞍馬街道が古墳を迂回するように西に曲がっていることから、比較的大きな古墳であったのではないかと推測されます。王家の北には古墳時代の集落・植物園北遺跡があり、当時の首長の古墳であったとも考えられます。この他にも高まりが描かれている地図もあることから、古墳群があった可能性もあります。

現在、この古墳は京都府教育委員会発行の『京都府遺跡地図』第

4分冊（1989）では「半木町塚跡」として登録されていますが、江戸時代には「王塚」と呼ばれた古墳であったと考えられます。今では見ることはできませんが、現在のこの辺りの地面が周辺と比べやや高いことから、地面の下から古墳の周溝などの遺構や土器などの遺物が発見されるかもしれません。

（高橋 深）

- 図1 『増補再版 京大総図』寛保元（1741）年
- 図2 『京都市實地測量地図』明治35（1902）年
- 図3 『京都近傍地図』大正4（1915）年 陸地測量部発行 大正4年10月
- 図4 国土地理院 1:2000地形図 平成5年

図1～3は、『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長16年～1940（昭和15）年）』柏書房1994年より転載した。